

2026年 3月 24日

武蔵野美術大学 学長 殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	秋葉麻由子	所属	日本画学科研究室
		職位	助教

研究課題	チェコ・イタリア・フランスの美術、及び古美術工芸品について
研究先機関	
主な滞在地 (国・都市名)	チェコ プラハ・ イタリア フィレンツェ・ フランス パリ
渡航日程	2025年 8月 11日 ~2025年 8月 29日(19日間)
研究目的・理由	日本画を専門とする立場から、チェコ・イタリア・フランスにおける美術および古美術工芸品を実地に視察・研究し、各国の美術表現、素材技法、保存展示の在り方を学び、日本画制作および研究活動に新たな視点を取り入れることを目的とする。
研究成果発表 予定 (展覧会、著書、論文発表等)	個展開催予定(2026年6月1日~6月11日) 第11回菅橋彦大賞展 出品

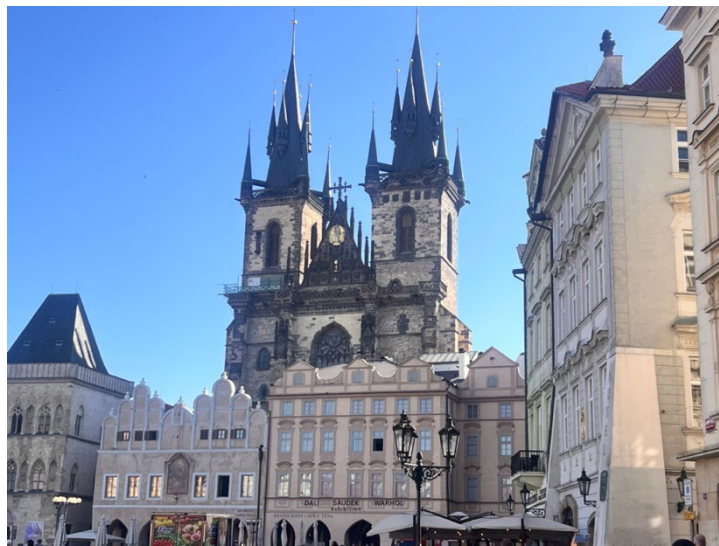
今回の海外研修では、プラハ・フィレンツェ・パリという美術史上重要な都市を訪れ、現地の古美術・工芸作品にも直接触れることで、日本画との比較を通じた表現理解の深化を目的とした。それぞれの国ごとに時系列順に振り返っていききたい。

プラハでは、ゴシックやバロックの宗教美術に見られる象徴性や金属・石材など素材の重厚な扱いを通じて、西洋における「精神性の造形化」のあり方を、日本画の象徴的構成と照らし合わせて考察した。

・プラハ 8月11日～8月16日

プラハでの滞在は6日間だったが街がそこまで大きくなかったため公共交通機関に乗りながらくまなく回る事ができた。プラハは「中欧の宝石」と称されるように、多様な美術様式が重層的に残る都市である。ゴシック、ルネサンス、バロック、アール・ヌーヴォーといった中欧の主要な様式が、街路や広場の中で自然に連続している印象だった。とりわけ旧市街広場にそびえるゴシック建築は、石造装飾によって中世の精神文化を伝えており、都市景観の中心的存在になっていた。一方、周囲の建築には柔らかな色彩のファサードや曲線的な装飾が見られ、バロックやロココ期の芸術観が表れており、生活文化の豊かさを感じさせる。また、19～20世紀にかけてのアール・ヌーヴォーやキュビズム建築も市内に点在し、プラハが近代美術の潮流にも積極的に関わったことを示している。

研究内容





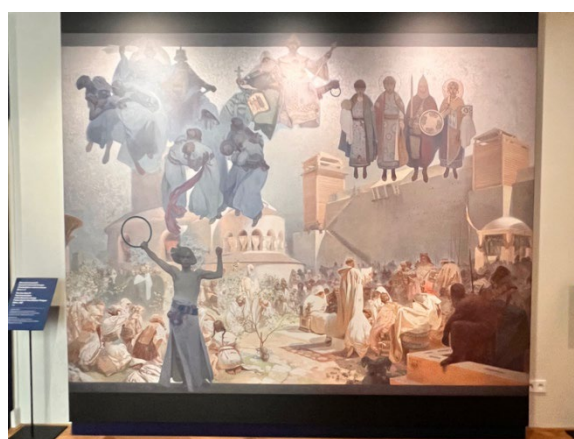
キュビズム博物館

プラハにあるキュビズム博物館には、三角や四角を組み合わせた、ふしぎな形の建物や家具が展示されていた。物の形をばらばらに見て、新しい形に作りなおすのがキュビズムの特徴であるが、日本が特有のやわらかい線や広い空間を使って、大切なところだけをすっきり見せる工夫をすることで、形をそっくりに描くより、「一番たいせつなところをつかむ」考え方が似ていると感じた。キュビズムと日本の絵画は見た目はちがいますが、どちらも「形を工夫して、もっとおもしろく見せたい」という気持ちが共通しているように思えた。私自身にとってキュビズム博物館を見て、新しい絵画の見方を教えてもらったようだった。



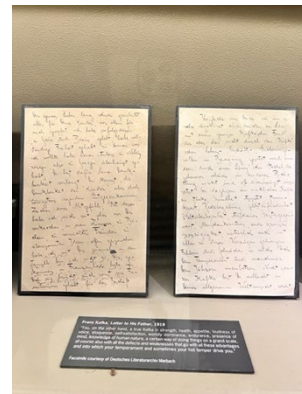
ミュシャ美術館

プラハは、中世から近代まで多彩な美術様式が共存する都市である。それぞれ異なる時代・文化背景から生まれた造形表現を示すが、視覚的思考や形の捉え方という点で、日本画との対話が可能である。ミュシャの作品は、アール・ヌーヴォー様式の影響を受けつつ、繊細な線と装飾性、明るい色彩によって理想化された女性像や植物を描く。これは、日本画における線の美しさや余白の活用、自然や人物の精神性を表す技法と通じる部分があることから対象の本質や印象を抽出することを重視するため、ミュシャの装飾的理想化とも通ずる部分が多々あった。



・カフカ博物館

プラハにあるカフカ博物館は、小説家フランツ・カフカの生涯と作品を見る事ができる場であった。館内では、カフカの原稿や写真、映像だけでなく、彼の物語の世界を表現したアート作品やインスタレーションも展示されていた。これらの作品は、カフカの描く不条理や孤独、カフカの空間を視覚化し、美術の手法で文学を体験できるように工夫されていた。特に、展示空間の構成や照明、立体的オブジェによる表現は、シュルレアリスムや現代美術の手法に通じ、観る者にカフカの物語世界に入り込んだ感覚を体感させるように作られていた。



・フィレンツェ 8月16日～8月21日

フィレンツェは、ルネサンス発祥の地として世界的に知られ、美術と建築の宝庫だと言われている。街には、ダビデ像やウフィツィ美術館の名画など、ルネサンス期の絵画や彫刻が数多く残っており、これらの作品は写實的に描くことを重視することで芸術の新しい時代の始まりを象徴している。

建築では、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の大きなドームが有名であるが、ブルネレスキが設計したこのドームは、幾何学的な美しさと技術の革新を兼ね備え、フィレンツェ建築の象徴となっている。また、パラッツォ・ヴェッキオやサンタ・クロチェ教会なども、ルネサンス建築の秩序や調和を体現している。教会などもたくさん行ったが、下記の3箇所に絞って説明していく。

サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂（ドゥオモ）

この大聖堂は、フィレンツェの象徴とも言える建築だが、本で見たことしか無かった為本物を見て思ったよりおおきいと驚いた。内部では、天井やクーポラ（丸屋根の内部）に描かれたフレスコ画がどの作品よりも素晴らしかった。中世～ルネサンス期の芸術と建築技術の融合を感じられる空間であった。

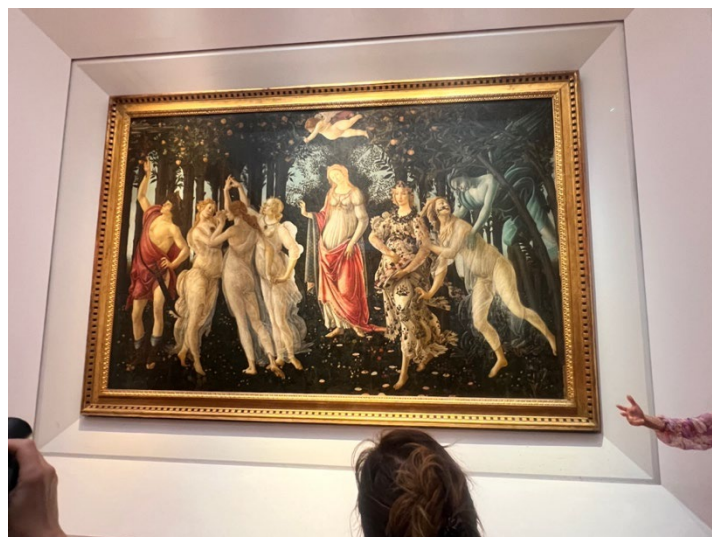






ウフィツィ美術館 (Uffizi Gallery)

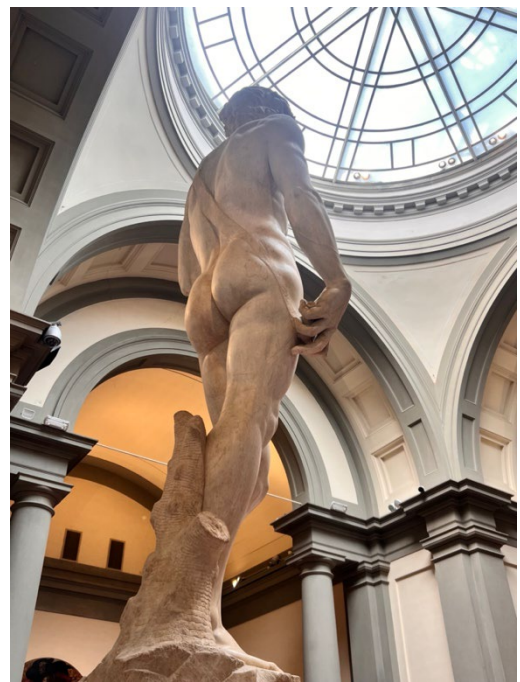
フィレンツェを代表する美術館で、西洋のルネサンス美術の傑作が数多く収められている。例えば、The Birth of Venus (ヴィーナスの誕生/Sandro Botticelli 作) はその代表作である。これも教科書や授業で見たことのある馴染みの作品だったが、本物を見ても本物だ、圧倒されたのと、思ったよりも色の発色が良いことが意外だった。





アカデミア美術館

ここには、David (ダビデ像/Michelangelo 作) がある。白大理石から彫り出されたこの像は、力強さと美しさが同居しており、前からの姿しか知らなかったがあの像は後ろから見るべき像であることを初めて知れた。この作品を観ることで、ルネサンス期における「人体の美」「写実と理想の融合」といった芸術の精神を直接感じられた。





フィレンツェは他にもモザイク画博物館、サン・マルコ美術館、サン・ジョヴァンニ洗礼堂、レオナルド・ダヴィンチ博物館、ピッティ宮殿など行ったが、教科書にあるような西洋絵画より、宮殿にある壁画が朽ちて綺麗だったり、モザイク画の制作工程や、宮殿に展示された煌びやかなドレスの方が見ていて飽きなかったし自身の制作に生かせそうな場面が多かった気がした。

・パリ 8月16日～8月16日

フランスの美術館、特にルーヴルやオルセーには、西洋の写実的な絵画や彫刻が多く展示されている。これらは遠近法や陰影を使い、立体的に世界を描くことを重視している。

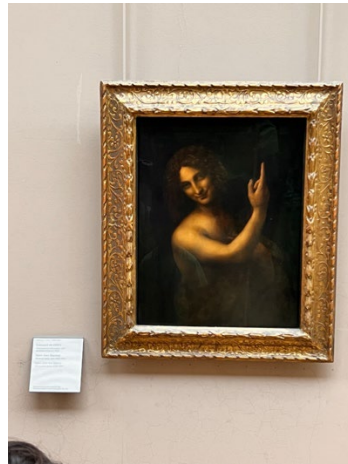
オルセー美術館に展示される印象派の作品には、浮世絵など日本画から影響を受けた表現が多く見られる。モネやドガは日本の構図や省略の美に刺激を受け、光や時間の移ろいを新しい方法で描いた。こうした作品を通して、フランス美術は日本画と対話しながら発展してきたことが分かる。

このように、フランスの美術館を訪れることは、西洋美術と日本画の違いだけでなく、互いに影響し合う造形の広がりを知る貴重な体験となった。今回はルーブル美術館をじっくりまわる事にした。

・ルーブル美術館

ルーブル美術館を訪れて、まずその広さと展示点数の多さに圧倒された。ガラスのピラミッドから館内へ入ると、歴史の層が積み重なったような空気があり、どの部屋にも物語が眠っているように感じた。特に「モナ・リザ」や「サモトラケのニケ」は実物を前にすると写真以上の存在感があり、美術の力を改めて実感した。限られた時間では到底回りきれず、また何度でも訪れたいと思える場所だった。





・クリニャンクールの蚤の市 (Marché aux Puces de Saint-Ouen)

パリでよく知られている、世界最大級のこの骨董市は単なるフリーマーケットではなく、美術品の宝庫としても高い評価を受けており、会場には家具や雑貨だけでなく、絵画、彫刻、版画、アンティークジュエリーなど、多種多様な美術品が並ぶ。特に特徴的なのは、美術品のジャンルの幅広さで、19世紀のクラシックな絵画から、アール・デコやモダンアートに至るまで、時代ごとの美術品が混在しており、可愛いものも多々見つけることができた。また、専門ディーラーが常駐している店舗も多く、作品の来歴や価値について詳しい説明を受けることもできた。

さらに、この骨董市の魅力は「一点物との出会い」であり、歴史や物語を持つ美術品に直接触れながら購入できるため、非常に特別な体験になりました。まとめると、クリニャンクールの蚤の市は、単なる観光スポットではなく、本格的な美術品市場としての側面を持つ骨董市であり、パリの芸術文化を体感できる貴重な場所だと思った。

・クリニャンクールの蚤の市 (Marché aux Puces de Saint-Ouen)

パリでよく知られている、世界最大級のこの骨董市は単なるフリーマーケットではなく、美術品の宝庫としても高い評価を受けており、会場には家具や雑貨だけでなく、絵画、彫刻、版画、アンティークジュエリーなど、多種多様な美術品が並ぶ。特に特徴的なのは、美術品のジャンルの幅広さで、19世紀のクラシックな絵画から、アール・デコやモダンアートに至るまで、時代ごとの美術品が混在しており、可愛らしいものも多々見つけることができた。また、専門ディーラーが常駐している店舗も多く、作品の来歴や価値について詳しい説明を受けることもできた。

さらに、この骨董市の魅力は「一点物との出会い」であり、歴史や物語を持つ美術品に直接触れながら購入できるため、非常に特別な体験になりました。まとめると、クリニャンクールの蚤の市は、単なる観光スポットではなく、本格的な美術品市場としての側面を持つ骨董市であり、パリの芸術文化を体感できる貴重な場所だと思った。



大学授業における研究成果の還元	今回、見たものを参考にしながら、グループ展や個展での作品発表を行っていきたい。 そういった活動や研究内容を発信していくことで、学生へも研究成果を還元したいと考えている。
-----------------	---

研究日程（全滞在期間）

出発日 (現地時間)	出発地 (国・都市名)	到着日 (現地時間)	到着地 (国・都市名)	研究内容等	滞在 日数
8/11 2:00	日本 東京	8/11 16:45	チェコ プラハ	ゴシックやバロックの宗教美術に見られる象徴性や金属・石材など素材の重厚な扱いを通じて、西洋における「精神性の造形化」のあり方を、日本画の象徴的構成と照らし合わせて考察します。	6 日間
8/16 13:35	チェコ プラハ	8/16 16:50	イタリア フィレンツェ	ルネサンスの透視遠近法や具象的な空間構成、また職人文化に裏打ちされた装飾芸術との接点から、日本画における「余白」や「間」の概念、平面的構成と対比し、空間表現の多様性とそれがもたらす精神的深度を探ります。	7 日間
8/21	イタリア フィレンツェ	8/21	フランス パリ	ルーヴルや装飾芸術美術館における古典から現代までの装飾・工芸の展開を、日本の工芸的精神と比較しつつ、美術における実用性と装飾性の境界、そして素材観へのアプローチの違いを検証します。	8 日間
8/28 20:25	フランス パリ	8/29 17:20	日本 東京		

以上

※ 欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。

※ その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。